別紙１－１

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　栗木　久美

論 文 題 目　日本語次元形容詞の意味研究 ― 認知言語学の観点から ―

論文審査担当者

主　査　名古屋大学　准教授　李　澤熊
委　員　名古屋大学　教授　　堀江　薫
委　員　名古屋大学　教授　　杉村　泰
委　員　名古屋大学　准教授　永澤　済

別紙１－２

本論文は、日常生活における様々な物事の様相を表す場合に用いられる次元形容詞の中から、使用頻度の高い「深い」「高い」「遠い」「広い」「長い」の５語を取り上げ、経験基盤主義に基づく認知言語学のアプローチを用いて、各語の複数の意味間の相互関係及び多義構造（多義構造全体における個々の意味の位置付け）を明らかにしたものである。

従来の次元形容詞の意味研究では、形容詞の各意味の意味特徴を記述することに主眼が置かれていたが、本論文は、形容詞の精緻な意味の記述だけでなく、複数の意味間の相互関係に焦点を当てて詳細に論じている。また、豊富な実例を的確に用いて「関心が高い／深い」のように、文脈によって類似の意味を表す場合について、類義語分析の観点から各語の相互の意味の類似点・相違点を明らかにしている。

以下、本論文の概要と評価の結果を報告する。

［本論文の概要］

第１章では、研究の目的と考察対象、意味分析の方法、本論文の構成について述べている。

第２章では、本論文の基盤となる理論的背景について概観している。具体的には、まず多義語の基本的な性質、多義語の位置付けについて先行研究を踏まえて概説している。また、多義語分析の課題とその解決のために援用する概念について、先行研究に基づき概観している。

第３章では、現代日本語の形容詞に関する先行研究を概観し、本論文における形容詞の位置付けについて検討している。まず、形容詞の分類に関しては、単語の意味により「属性形容詞」と「感情形容詞」に分類するものと、形容詞における話し手の主体的な関わりである「時間的限定性」と「評価のタイプ」を軸に「特性形容詞」と「状態形容詞」に分類するものがあるが、どちらの分類方法においてもその中間に位置付けられるものがあり、分類は連続的であることを確認している。また、形容詞の相対的な判断・評価を表す基準についても検討しているが、それらの基準は固定的なものではなく、判断の基準は話し手である主体の対象に対する把握の仕方に基づいていると主張している。

第４章から第８章は、「深い」「高い」「遠い」「広い」「長い」の５語について、精緻な意味記述を行っている。以下、概要を述べる。

まず、各形容詞の複数の意味間の相互関係については、プロトタイプ的意味を起点とし、その他の意味がメタファー、メトニミー、シネクドキーという３種の比喩のいずれかによって相互に関係づけられていることを明らかにしている。特に、「深い」については、空間から非空間への意味拡張について、「容器」のイメージスキーマを背景とした意味拡張と、「深い場所」のフレームを基盤とした意味拡張があることを明確にしている。また、「高い」については、概念メタファーの考え方を援用し、詳細に分析を行っており、上下のメタファー「MORE IS UP」と「HIGH STATUS IS UP」が「高い」の空間から非空間への意味拡張の基盤となっていることを明らかにしている。さらに、「遠い」については、「理想・目標」のフレームに基づく分析が有効であることを主張している。続いて、「広い」については空間的用法において、「広い」

が＜面積＞＜空間＞＜距離＞を表す背景について、「広い場所」のフレームが動機づけになっていると述べている。最後に、「長い」については、空間から非空間への意味拡張について、「文書」のフレームを基盤としたものがあること、また、非空間の意味には「発話」のフレームを基盤としたものがあることを明らかにしている。

次に、5 つの次元形容詞の多義構造については、Langacker(1987)が提案する「スキーマティック・ネットワークモデル」と籾山(2021)が提案する「統合モデル」を援用し、多義構造全体における個々の意味の位置付けを明確にしている。

第 9 章では、5 つの次元形容詞を類義語とみなし、類義語分析を行っている。まず、各形容詞が 1 次元の量を表すとき、各形容詞の意味が空間の量を表す際の要素である「量」「基点」「終点」「方向」「面」のいずれを含んでいるかにより、類似点と相違点が生じることを明らかにしている。次に、「深い」と「高い」が、「深い／高い関心」「深い／高い関係」「深い／高いレベル」のように、空間の意味から非空間の意味へ拡張する際、「深い」は「容器」のフレームを基盤とし、「高い」は上下のメタファーを基盤としていることが「深い」と「高い」の意味の相違に関係していると述べている。また、「長い」「深い」「遠い」における空間的な意味と時間的な意味については、フレームの観点から分析し、この 3 語は、空間領域における意味の構成要素が時間領域に写像され、時間領域において「2 つの時点」「2 つの時点間の時間量」の要素を含んでいる点で類似していることを明らかにしている。さらに、複数の次元形容詞が非空間的用法において類似の意味を表すとき、その相違はイメージスキーマや概念メタファー、フレームにより説明できるものがあることを明らかにしている。

第 10 章では、本論文のまとめと今後の課題について述べている。

[本論文の評価]

本論文は、現代日本語における次元形容詞 5 語の複数の意味間の相互関係及び多義構造を明らかにした好論文である。本論文が高く評価できるのは以下のような点である。まず、5 語の意味分析に関する先行研究が十分に整理・検討されており、問題点などの指摘も妥当である。また、本論文の理論的基盤である認知言語学の諸概念について分かりやすく整理・検討されており、論文の構成もしっかりしている。さらに、個々の語の意味と類義語間の意味の違いについて、従来の研究よりも精緻な分析がなされており、特に類義語分析においては、記述に説得力がある。

一方、審査員からは以下のような指摘もあった。まず、考察対象語の選定のあり方について、今後の日本語の意味研究にどういう形で利用・貢献できるかなどを含め、より説得力のある記述が求められる。次に、多義語分析の課題についてさらに考察を深める必要がある。具体的には、複数の意味（多義的別義）の認定については、結論に至るまでの過程を含め、方法論をより明示的に示す必要がある。例えば、複数の意味を抽出する過程が主観的な判断に任されているところが多いため、判断テストの導入などの具体的な認定基準を明示し、より説得力のある

別紙１－２

記述を目指すべきである。次に、歴史的な側面も視野に入れ、すでに消滅してしまった意味用法も検討することによって、さらに広がりを持った研究に繋がる。しかし、上記のようなさらに検討・改善すべき点はあるものの、全体的にまとまりのあるものに仕上がっており、完成度の高い論文であると評価できる。

以上の評価に基づき、審査員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。